

本章の概略

- 「熊本の学び」では、「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める子供」を実現する授業づくりを目指します。そのためには、子供の学ぶ意欲を高め、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることを徹底し、「主体的な学び」の基盤づくりを進めていくことが大切です。
- そこで大切になるのが、視点の転換です。これまでの授業は、主に教師の側、教える視点で構成してきました。「熊本の学び」では、子供の「学び」に視点を転換し、「子供たちの学びの側」から考え、子供たち一人一人の「学び」を十分に理解することを大切にしています。
- 教師の視点から示していたこれまでの授業を子供（学習者）の視点で再構築し、子供の学びの姿を分かりやすいフレーズで示しました。子供ともイメージの共有化を図ることができるように、「熊本の学び」における授業づくりのポイントを以下のように整理しました。

「熊本の学び」における授業づくりのポイント

- 子供の『わくわく』（知的好奇心や興味・関心等）が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫
- 子供の『なぜ』『おそらく』（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫
- 子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫
- 子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』（実感や達成感、更なる意欲等）が生まれる終末の工夫

- 本章では、本県が目指す子供たちの学びの姿の実現に向け、単元や題材（以下、「単元」という）など内容や時間のまとまりを見通した授業構想の在り方や、見方・考え方を働かせて課題解決を図る学習活動の在り方などを盛り込んだ学習構想案、探究的な学びを展開する「総合的な学習の時間」や能動的に学び続ける力の土台となる「キャリア・パスポート」、安心と信頼を基盤とした高め合う学級づくりについて示しています。

重点1 子供の『わくわく』が連続し、『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる授業を目指しましょう

◆ポイント1

子供の『わくわく』(知的好奇心や興味・関心等)が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫

◆ポイント2

子供の『なぜ』『おそらく』(疑問や予想等)が生まれる導入の工夫

◆ポイント3

子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』(挑戦や納得等)が生まれる展開の工夫

◆ポイント4

子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』(実感や達成感、更なる意欲等)が生まれる終末の工夫

★学びの深まりのために

主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの効果的な活用

重点2 「単元のゴールの姿」に向けて、「単元・題材のまとめ」で授業を構想しましょう【学習構想案】

- ◆「学習構想案」を作成するに当たっての作成要領及び留意事項
- ◆「資質・能力」を育成する学習構想案の具体例(例：小学校国語科)

重点3 自分なりの問いを立て、探り、新たな問いへとつながる「探究的な学び」を展開しましょう

- ◆総合的な学習の時間の全体計画、年間指導計画、単元計画作成について
- ◆夢の実現に向けて～主体的に学びに向かう力を育むキャリア教育の充実～

重点4 安心と信頼にあふれ、高め合う学級をつくりましょう

- ◆本重点の概要
- ◆学級づくりで大切にしたいこと(熊本の教師の心がけ10か条)

「熊本の学び」における
授業づくりのポイント
授業の在り方は

28ページへ

「熊本の学び」による
新たな学習指導案の提案
学習構想案は

45ページへ

「熊本の学び」における
実社会や実生活とつながる
探究的な学びは

55ページへ

「熊本の学び」における安心
と信頼にあふれ、高め合う
学級づくりは

66ページへ

重点1 子供の『わくわく』が連続し、『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる授業を目指しましょう

◆ポイント1

子供の『わくわく』(知的好奇心や興味・関心等)が連続し、『学びを生かそう』とする姿が生まれる単元デザインの工夫

1 単元デザインの必要性

- 学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、単元など内容や時間のまとまりを見通して授業を構想することが求められています。
- 「主体的・対話的で深い学び」は、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるのではなく、単元など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、子供たちが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考えて、授業を構想していくことが大切です。
- そこで、「熊本の学び」では、子供たちに育成を目指す資質・能力を確実に育むことができるよう、単元を通して学んだ後の姿(以下、「単元のゴールの姿」という)を設定し、単元など内容や時間のまとまりを見通して授業を構想することを大切にしていきます。
- 子供たちの学びに対する知的好奇心や興味・関心等(『わくわく』)が連続し、学んだことを次の学習や実生活に生かそうとする姿が生まれるように、単元をデザインしましょう。



Before

- ・校内研修等の事前・事後の研究会では、**本時の学習(展開)**や**教師の教え方**を中心に協議が行われている。
- ・単元における子供の実態を把握し、単元の目標は設定されているが、学習活動が**目標の方向**に向かっていない。
- ・**指導書**に書かれている内容(指導例)だけで、指導計画を立て、毎時間の授業を展開している。



After

- ・研修会では、一人一人の子供の学びの姿から、単元全体の構想や、その中での本時のあり方を検証する。
- ・単元におけるゴールの姿を実現させるために必要な**学習課題**や**学習活動**を設定し、学習過程を構想する。
- ・授業者が**学習指導要領**の内容を十分理解し、子供たちの学びに応じて、内容や時間の**まとまり**を意識した単元をデザインする。

2 育成を目指す資質・能力と単元デザインについて

- 子供たちに求められる資質・能力を確実に育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を進めていくことが重要です。そのため、単元を通してどのような子供たちの姿を目指していくのかを明確にイメージし、単元を構想しましょう。

学習者の視点に立った「熊本の学び」へ

「熊本の学び」で大切にしていることは、「『子供たちの学びの側』から考える」ということです。子供たちを「学びの主体」として育て、子供たちが学んだことを次の学習や自らの人生、さらには、社会のために活用できるという実感を積み上げる営みです。



子供たちの能動的な学びは、教師の綿密かつ計画的な準備と質の高い指導の上に実現するものです。これまで学んだことや実生活とのつながりを問いながら知識の活用を促したり、振り返りの場面で自分や社会との関連について考えさせるなど、学習活動や言語活動の工夫も求められるでしょう。

3 単元デザインの手順及び留意事項

1

単元のゴールの姿を設定し、ゴールに至るまでの子供の思考の流れを考えます。

学習指導要領を読み解き、子供の実態を踏まえた上で、教材（題材）を研究し、単元終了後の子供の姿（単元のゴールの姿）を具体的に設定しましょう。単元終了後に、**どんなことが分かり、できるようになったらいいのか、実生活や次の学びにどう生かすのか**など、具体的な姿で設定しましょう。

2

単元のゴールに迫る、単元を通した学習課題を設定します。

設定した単元のゴールの姿に迫るために、単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）を設定し、子供たちの能動的な学びを実現するようにします。

3

単元のゴールの姿を実現するために必要な学習活動を設定します。

学習指導要領（目標や内容）や教科書等の内容に基づいて、単元のゴールの姿を実現するための学習活動を単元のまとまりを見通して設定しましょう。

4

単元全体を見通して、学習の過程を構想します。

単元全体を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するかなど、学習過程を構想します。

5

子供たちと単元の過程や単元のゴールの姿を共有します。

表や構想図にして、**単元における自らの学びの姿**をイメージし、共有できるようにしましょう。

【手順及び留意事項】 詳細版

1 単元のゴールの姿を設定し、ゴールに至るまでの子供の思考の流れを考えます。

これまで

単元の目標を設定し、目標の達成を目指してきました。

これから

単元の目標とともに、単元のゴールの姿を具体的に設定し、次の学習や実生活等に生かすことができるようにします。

【単元の目標】

学習指導要領に示された内容に基づいた学習のまとまりを通して育成を目指す資質・能力のことです。



【単元のゴールの姿】

子供の実態を踏まえ、単元のゴールの姿を設定します。単元を通して学習し、そこで身に付けた力を次の単元等の学習や今後の実生活に生かそうとする姿をより具体的に設定し、学習を構想します。

2 単元のゴールに迫る、単元を通じた学習課題を設定します。

子供が単元を通して興味・関心をもって深く考えることができるか、見方・考え方を働かせて課題解決を図ることができるかといった視点で子供たちの学びの側に立って、学習活動を方向付ける必要があります。学習課題（単元の中心的な学習課題）は、子供の資質・能力を育成するための学習活動を方向付けるものとなっているか、日常生活や社会生活との関連のあるものであるかなどについて検証し、質の高いものにしていきましょう。

3 単元のゴールの姿を実現するために必要な学習活動を設定します。

各教科の学習指導要領の目標や内容には、観点ごとに育成すべき資質・能力が示されています。各教科等の学習指導要領の解説をよく読んで学習活動を設定しましょう。

必要に応じて、当該単元だけでなく、関連する既習の学習内容について、子供たち自身がフィードバックして振り返ったり、学び直したりする学習活動を設定しましょう。

4 単元全体を見通して、学習の過程を構想します。

単元のゴールの姿を実現させるために、単元における「学習活動」を設定しましょう。その際には、子供の思考の流れを捉えて学習活動を的確に配置することが大切です。

その際、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことをまとめたり振り返ったりする場面をどこに設定するか、単元全体の中でバランスよく組み立てることが重要です。

5 子供たちと単元の過程や単元のゴールの姿を共有します。

単元のゴールの姿や単元デザインは、教師だけのものであっては子供の主体的な学びの姿にはつながりません。単元の導入では、単元終了後にどんなことができるようになるのかを教師と子供たちとで共有し、子供たちが自ら学習の見通しをもつことが大切です。

例えば、振り返りシート等で単元のゴールまでの過程を見通すことができると子供たちの学びが主体的になり、自らの学びを調整したり、変容を自覚したりすることができます。学ぶ意欲を引き出し、継続させ、学びの深まりをつくり出すことにつながります。

4 単元など内容や時間のまとまりを見通した単元のデザイン（例）

- 単元をデザインする上で大切にしたい項目を設定する際には、以下を参照しましょう。設定する際の留意事項や具体例を示しています。

【参照】 「学習構想案」の「1 単元構想」の前半部分を抜粋

単元の目標	※ 単元・題材における目標を観点ごとに設定します。 ①・・・ ②・・・ ※ 国立教育政策研究所から示された例を参照して設定 ③・・・ します。年間指導計画等も参照してください。		
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	※ 学習指導要領に示されている目標（三つの柱で整理）を基に、「内容のまとまりごとの評価規準」が設定されます。そこから、単元・題材の評価規準を設定します。学習指導要領解説を基に、観点ごとに、具体的に評価規準を設定しましょう。（国立教育政策研究所から示されている例を参照してください。）		
単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
※ 単元で学んだ後の子供の姿を具体的に設定します。学んだことを次の学習や実生活で生かそうとする姿をイメージして設定します。 ※ 文末は「～している子供」「～しようとしている子供」等で表すことが考えられます。 ※ 各学校で重点的に育成を目指す資質・能力と関連付けて設定することも考えられます。			
単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）		本単元で働かせる見方・考え方	
※ ゴールの姿の実現を図るために、単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題など）を設定します。問いかけや呼びかけになるように表記します。		※ 学習指導要領解説に示されている、各教科等における「見方・考え方」を基に設定します。	

※研究指定校（H30～R1）である大津町立室小学校及び御船町立御船中学校の研究実践の例

単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）	
国語 (小学校)	言葉に着目して物語を読み、人物像や情景描写に関する表現の工夫や変化を捉え、作品の魅力を友達やお家の人に伝えようとする子供
社会 (小学校)	販売に関わる仕事は、消費者の多様な願いをふまえて、売り上げを高めるように工夫して行われていることを理解し、買い物をするときなど、地域の消費者の一人として社会を見ようとする子供
算数 (小学校)	友達と関わり合いながら、「10とあといくつ」や10の補数の見方を基に、数を操作して計算の仕方を考えたり、日常生活から様々な加法となる問題を見出したりする子供
理科 (中学校)	電解質水溶液に電気が流れるとき、水溶液と電極付近で、どんなことが起きているのか友達に説明するとともに、金属メッキされた身の回りの製品について学んだことと関連付けて事象を捉えようとする子供
英語 (中学校)	人称代名詞目的格の him や her、また既習の表現を使って、友達に自分の家族のことや好きな人・尊敬する人などのことを自信をもって紹介しようとする子供

※具体例は、随時、熊本県教育委員会のホームページに掲載しますので、参考にしてください。

5 子供たちが単元・題材における学びを見通し、振り返るための工夫

- 子供たちを「学びの主体」として育て、子供たち自身に「学んだことが、次の学習や自らの人生、社会のために役立つ」という実感を積み上げるためには、子供たちが学習を見通し、自らの学びを調整したり、自己の変容をつかんだりすることができる振り返りが重要です。
- ここでは、振り返りシートの例を示します。校内研修等で検討し、共通実践を図りましょう。

振り返りシートの例

小学校6年国語 「海のいのち」 学びシート

6年〇組〇番 名前 _____

単元のめあて

学習課題と見方・考え方

※ 単元を通じた学習課題や単元で働かせる見方・考え方を書き、子供たちがいつも意識して、学習に取り組んでいくような工夫も考えられます。

学習計画	振り返りポイントの記録
①推薦カード作成の見通しを立てる。 ②物語のつくりや内容を確認する。	②の後に振り返って記録しよう！
①父の人物像から太一の心情を読む。 ②与吉いさの人物像から太一の心情を読む。 ③母の会話から太一の心情を読む。 ④クエの描写から太一の心情を読む。 ⑤太一の表情の描写から心情の移り変わりを読む。 ⑥あと語りの場面の効果について考える。	④の後に振り返って記録しよう！ ⑥の後に振り返って記録しよう！
①推薦カードを完成させ、紹介し合う。 ②学習を振り返って次へのステップを話し合う。	

単元の学びを振り返って

※ 目標とした「単元のゴールの姿」に到達できたか。何ができるようになったか、何ができなかったのか、その要因は何か、ここでの学びを何に生かせそうかなど、自らの学びを振り返って書きます。



なるほど。この学習ではこんなことができるようになったらいいのね。できそうだな。

前に解決できなかった〇〇を次は、友達と話し合っ、協力して解決してみよう。

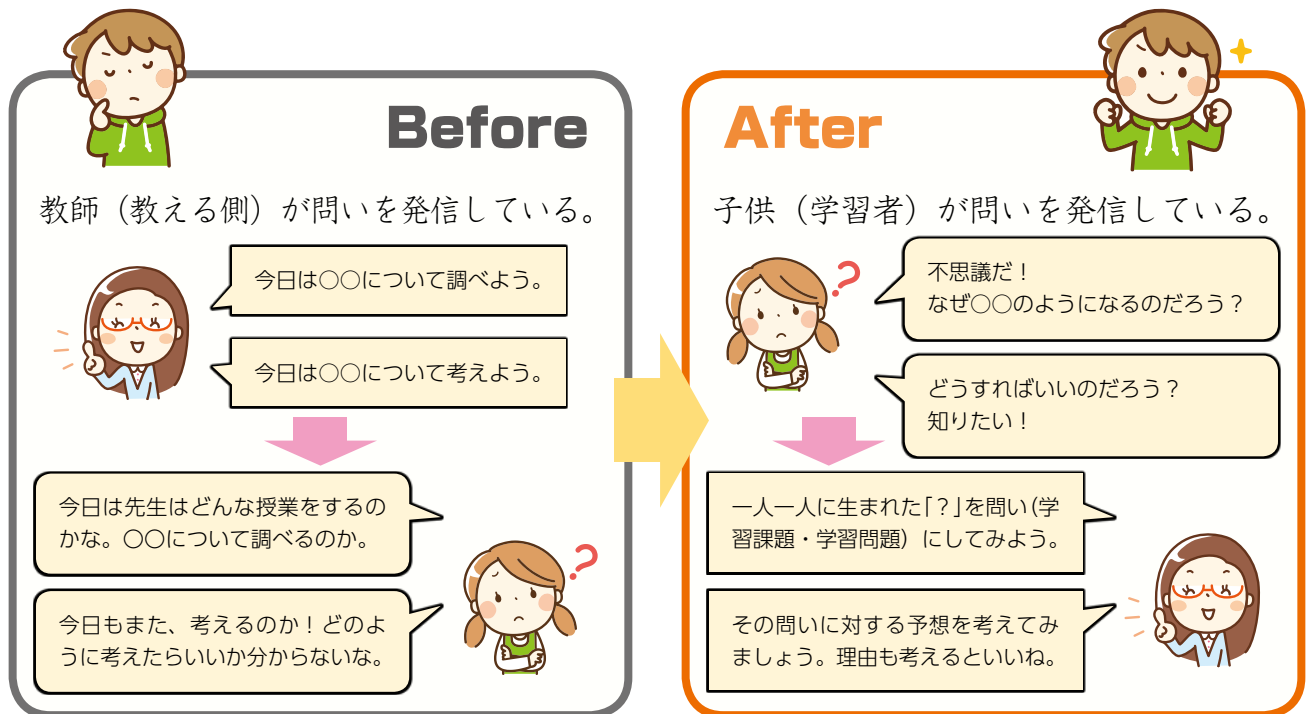


◆ポイント2

子供の『なぜ』『おそらく』(疑問や予想等) が生まれる導入の工夫

1 『なぜ』『おそらく』 が生まれる導入の工夫について

- 主体的に学びに向かう子供たちの姿へとつなげるためには、子供が発する『なぜ』『おそらく』というつぶやきを拾い、それを生かして学習を方向付けながら問い(学習課題、学習問題)としてまとめていくことが大切です。子供の疑問や興味・関心を把握し、いかに導入で生かすことができるかが鍵となります。
- ここでは、導入場面での例を挙げていますが、子供たちが主体的に学びに向かおうとする時に大切な『なぜ』『おそらく』という課題意識は、展開の場面や終末の場面など、様々な場面で生まれます。子供たちの知的好奇心を高め、『わくわく』しながら意欲的に学びに向かわせる働きかけが大切です。



2 問いを引き出すことについて

- 子供たちが問いをもつようになるには、導入場面で子供たちの知的好奇心や興味・関心を高めることが重要です。そのためには、子供たちが『わくわく』する教材・教具等の工夫・準備と効果的な提示が必要となります。
- 子供たちが疑問を持つ教材、子供たちの驚きや発見がある教材、子供たちの矛盾や困惑、葛藤を引き出し、心をゆさぶる教材などとの出会わせ方を工夫すれば、問いが生まれ、学習が動機付けられ、『やってみたい』『調べたい』という学ぶ意欲が高まります。

3 子供から「問い」を引き出すポイント

(1) 教師自らが『わくわく』するものを

教師自らが『わくわく』するものは、学習者も『わくわく』するものです。自分が考えた手立てが『わくわく』するものか、子供の立場に立って考えたり、事前にやってみたりしましょう。

(2) 子供の『なぜ』『おそらく』が生まれる言葉かけや教材・教具の提示を

学習者が疑問をもったり、発見したりすることができる教材・教具等を提供することで好奇心が高まります。子供の生活体験や既習事項を基に、問いを引き出すためのきっかけとなる言葉かけや文章、図や写真、表やグラフ及びイラストや実物などの教材・教具等を作成し提示の仕方を工夫してみましょう。

(3) 答えのない問いや創造するテーマなどを

誰も答えを知らないものは、正解・不正解といった発想がないので、自由な発想を養う機会になります。また、他者と自分に問いかけ、問い直し、問い続けることで、答えなき問いを問い続け、新しい考え方や価値などを創造する力の育成にもつながります。

子供が問いをもつことにより、こんな効果が期待できます

① 学びに向かう力が高まる

教師から与えられる学習課題に取り組む、教師の発問に対して答えるという授業では、子供たちは学習課題を自分ごととして捉えられません。自分ごととして捉えていない学習課題に対しては、主体的・意欲的に取り組むことが難しくなります。

「なぜだろう」「不思議だ」「知りたい」と課題意識をもち、学習課題を自ら立てることができると、子供たちが問いを自分ごととして捉え、学びに向かう力が高まります。

② 問う力と見通す力が高まる

子供たちが、「自分に問う」「教材に問う」「他者に問う」など、問いを発する経験を積んでいくことが大切です。そうすることで子供たちは、問いに対して、すぐ解決できそうな問い、みんなと協力して解決する必要がある問いなど、学習を見通す力が高まっていきます。

③ 主体的に学習に取り組む態度が高まる

子供たちは、自らの学びを「何を」「どのように」「どうして」などと問うことで、現在の自分の知識を整理することができます。

また、自分は「何が知りたいのか」「なぜ知りたいのか」「知ることによってどうするのか」「知るによって何ができるのか」「知るによって何が変わるのか」といったことを考えるきっかけが生まれ、課題解決に向かって粘り強く取り組んだり、自らの学びを調整したりしようとする態度が高まります。

導入の工夫の例

単元名：「大地のつくりと変化」 小学校6年生 理科



子供たちは、同じ地層の重なり具合を考えながら、地層パズルに挑戦し、楽しく活動しながらも、地層の重なり方の規則性や断層の特徴に注目し、課題意識をもっていきます。

縞模様がつながるように並べるといいんじゃない？

完成したけど、縞模様がずれているところがあるぞ！どうしてかな？

単元名：「人口の特色」 中学校2年生 社会科（地理的分野）

熊本県の人口ピラミッドの変化と予測

2つの資料を提示し比較させ、驚きや疑問を引き出します。



出典：国立社会保障・人口問題研究所



昔と今の熊本県の人口ピラミッドを比べて見みると、形が大きく変わっているけど、なんでこんな形になっているのかな？

年代によって、人口が多かったり、少なかったりしているのはなぜかな？ その年には、何か起きたのかな？

◆ポイント3

子供の『やってみよう』『なるほど』『きっと』(挑戦や納得等) が生まれる展開の工夫

1 「展開の工夫」で目指す姿について

- 子供たちが学び合う（練り上げる）場面では、『やってみよう』『なるほど』『きっと』というつぶやき生まれ、考えや価値観の違う他者と対話し、根拠を明確にして相手に伝える中で、納得する解を導いていくなど、子供たちが主体的に学びに向かうことが大切です。
- 学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることに主眼をおいた上で、子供たちが考える場面とグループなどで対話し、協働して問題を解決する場面をどのように組み立てるかが大切です。

子供たちに「考えを伝えたい!」「相手の考えを聞きたい!」「調べたい!」「読みたい!」「解いてみたい!」と感じさせることで、主体的に学ぶ態度を育てます。
また、教師が、子供たちに学び合う必要性をいかに感じさせるかが大切です。

Before

こんな展開場面に思い当たることはありませんか。

発表してください。

私は〇〇と考えました。

同じです。私も〇〇と考えました。

導入は盛り上がっていたのに、話し合いは盛り上がりません。

もう少し、深まりがある学習にできないかなあ。

After

私は〇〇と考えました。

同じです。私も〇〇と考えました。

だれの説明と似ていますか。違うところはありますか。

友達の考えを聞いて、気付いたことはありませんか。

どこに着目したり、考えたりすれば解決できますか。

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、教師による積極的なコーディネートの方法を考えてみませんか。

展開の工夫の例

主体的・対話的に学ぶために

子供たちが学ぶことに興味や関心を持ち、課題解決に向けて子供たち同士の学習活動の質を深めていく際に生まれる「やってみよう」「なるほど」「きっと」というつぶやきは、子供自身が「学びとる授業」につながります。



「どう考えますか？」(自由回答式)
「どれだと思いますか？」(選択式)

「きっと…」 「たぶん…」
「こっちなかな…」
「おそらく、こうじゃないかな…」



「どう考えますか？」という拡散的な問いは、子供たちの考えを広げさせることにつながります。
「どれだと思いますか？」と根拠をもとに自分の考えをもつ問いは、自分の考えを明確にもたせることにつながります。

やってみよう

生かす



「みんなの考えを共有しましょう。」

私の言ったこと伝わったかな？



分かるよ。こういうことだよ。

私は〇〇〇と考えました。なぜなら…



わかったなるほど

自分の考えを互いに伝え合うことで、他者の考えを知ることになり、自己の考えを広げ深めることができるようになります。



「似ている考えや他の考えはありませんか？」

私は、花子さんと同じ考えだと思っていたけど、少し違ったよ。
〇〇と考えたよ。



なるほど。
でも、〇〇の部分は花子さんと似ているね。
ぼくは□□を使ったよ。

お互いの意見の相違点に気付く発問を行うことで、新たな考えに気付いたり、自分の考えをより根拠のあるものとして考えを深めたりすることができるようになります。

つなぐ

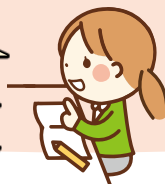


「今日の学習で何が分かりましたか。」
「どう生かしますか。」

今日の学習で、〇〇が分かった！

今度は、太郎さんの方法で考えてみたい。

この問題はどうなるのかな



子供たちが自ら学習を振り返る発問を行うことで、学びの価値を自覚したり、次の学びに向かう問いや課題を明らかにしたり、学習意欲を高めたりする活動ができるようになります。

きっと

伸ばす

単元・一単位時間の子供の姿



深い学びに導くために

各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、課題解決を図っていくことができるように、子供たちの思考を促し、学習が深まるようにしましょう。

教師が積極的にコーディネート（ファシリテート）

「どう考えますか？」（自由回答式）
「どれだと思いますか？」（選択式）など

- ☆子供たちのつぶやきが聞こえるなあ
- ☆自力解決のヒントを示したい

「近くの友達と相談してみましよう。」

「みんなの考えを教えてください。」

- ☆花子さんは〇〇のことを言いたいんだな
- ☆聞き手のみんなには伝わっているのかな？

「花子さんが発表したことはどういうことでしょうか。」
「近くの友達と相談してみましよう。」
「花子さんが発表したことを他の言葉で説明してくれる人はいませんか。」

- ☆似ている考えや、よりよい考えを広げたい

「花子さんの考えと似ている考えはありませんか。」
「他の考え方はありませんか。」

- ☆共通点を見付けてほしい

「これらの考えを見て気付いたことはありませんか。」

- ☆新しい見方・考え方に気付いてほしい

「どこに着目したり、考えたりすれば解決できましたか。」

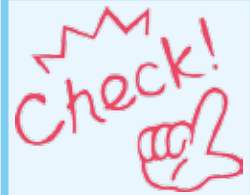
- ☆次時の学習につなげたい

「もし、〇〇だったら、どうなりますか。」

- ☆家庭学習につなげたい

「似たような問題を作れませんか。」

単元・一単位時間で身に付けたい力



子供たちは自分の考えを伝えたいと感じたか。

対話の必要性がある課題設定だったか。

子供たちが話し合う目的や手段を明確にできたか。

子供たちの表現を生かしているか。

机間指導を通して意図的に指名しているか。

子供たちが練り上げのよさを感じる言葉かけができたか。

自分の力でやってみたいという新たな課題を準備しているか。

◆ポイント4

子供の『分かった』『できた』『もっとやってみよう』(実感や達成感、更なる意欲等) が生まれる終末の工夫

1 『分かった』『できた』『もっとやってみよう』が生まれる工夫について

- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、学習のまとめや振り返る場面をどこに設定するのか、単元全体を見通してデザインすることが必要です。
- 授業者には、『分かった』『できた』という実感や達成感のある学びにつなげるための「(学習の)まとめ」や、『もっとやってみよう』という学習意欲につなげるための「振り返り」などについての明確な視点と意図が求められます。



Before

- ・学習の見通しがもてず、受け身の学習で終わってしまう。
- ・学習課題を通して「何が分かったか」や「何を考えたか」が分からない。
- ・「何ができるようになったか」をメタ認知できない。
- ・今日の授業の感想を子供たちにただ単に発言させたり、教師がまとめたことをノートにそのまま書き写させたりするだけになっている。



After

- ・身に付けるべき資質・能力が明確になることで、単元を見通すことができ、学んだことを実生活や社会生活と結び付けることができる。
- ・学習課題を通して子供に学びの視点を与えることで、子供自身が「学び」を自覚し、自分自身の成長や学ぶ喜びの実感につながる。
- ・子供が自分の言葉や学習した内容を使って学びをまとめたり、振り返ったりすることで、新たな疑問や課題の発見につながり、学びを広げることができる。
- ・教師が子供の言葉を価値付けしながら学びをまとめたり、振り返ったりすることで、次の学びに向かう力を育むことができる。

**『分かった』『できた』を実感し、
『もっとやってみよう』へ!**

2 学習内容と学習状況をまとめ・振り返るために

(1) 終末における「まとめ」「振り返り」の在り方について

「まとめ」と「振り返り」については、これまでも大切に取り組まれてきました。しかし、それぞれの目的が不明確なまま取り組まれているという状況も見受けられます。そこで、「まとめ」と「振り返り」について、次のように整理しました。

「まとめ」「振り返り」の整理

	まとめ	振り返り
概念	子供が学習した内容を確実に身に付けることができるように、何を学んだのかを明らかにする活動	「学び」の価値や成果を自覚したり、「次の学び」に向かう問いや課題を明らかにし、学習意欲を高めたりするために、子供たちが自らの学習を振り返る活動
なぜ必要か	子供が学習課題で分かったことを確認し、集団全体で共有したり、何を学んだかを実感し、深い理解につなげたりするため	「何ができるようになったのか」「何ができなかったのか」を子供たちに自覚させることで、次の学習や実生活につなぐため
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○単元を通して身に付けるべき資質・能力を明確にすること ○何を学ぶのかを明確にするために、その時間の明確な到達目標を設定すること ○指導と評価の一体化を図るため、「めあて」や「学習課題」との整合性を図ること ○子供の思考過程等が見える板書を残したり、丁寧なノート指導を行ったりすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○子供自身が自分の学びを的確に見つめられるように、「何を振り返るのか」を明確にすること ○子供が、自分自身の学びを客観的に分析・修正・改善し、メタ認知できるよう、自分の言葉で自分の学習を振り返ることができるようにすること ○子供自身が自分の学びの過程を的確に見つめられるように板書等で何を学んだかを明確に示すこと

(2) 終末における「振り返り」の重要性について

「振り返り」は、子供たちが自分自身と対話し、「自分がその学習でどのように変わったのか」「新たな問いや課題は何か」「家庭学習や次の授業でチャレンジしたいことは何か」などを明確にすることをねらいとしています。

また、「まとめ」の活動において、学んだ内容を「知識・技能」として明らかにした後、「振り返り」の活動において「何ができるようになったのか」、「何ができなかったのか」を子供たちに自覚させることは、習得した「知識・技能」を、「活用する力（思考力・判断力・表現力）」や「主体的に学習に取り組む態度」につなぐ上でも、重要な活動となります。

「振り返り」の視点の例

※ 「振り返り」の視点は、2～3点に絞り込むようにする。

- ① “いいな！”と思った友達の考えは何か？
(“いいな！”の観点は、その時の学習のめあてや中心発問に対応して変わります。)
- ② “納得できなかったこと”や“分からなかったこと”は何か？
- ③ 何ができるようになったか？なぜ、できなかったのか？
- ④ 学習の前後で自分の考えや態度がどのように変わったか？
- ⑤ “新たな問い”や“課題”は何か？
- ⑥ “新たな問い”や“課題”をどのように解決したいか？
- ⑦ “学んだこと”や“気づき”を、生活や次の学習にどう生かすか？
- ⑧ 家庭学習で何を調べてみたいか？



※ 「振り返り」の発問の例

本時の「振り返り」では、

- ① 分かったこと
 - ② 感想（日常場面と重ねて）
 - ③ 参考になった友達の発言
 - ④ 疑問に思ったこと（新たに考えた問い）
- の4つを中心にまとめましょう。

これから学習する「14歳の自画像～夢や目標に向かって～」について見通しをもって、次の学習につなげることができるよう、本時の学習を振り返りましょう。

※ 研究指定校（H30～R1）である天津町立室小学校及び御船町立御船中学校の研究実践の例です。

★学びの深まりのために

主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの効果的な活用

1 ICT活用について

- 目的を明確にしてICTを授業で活用すると大きな効果が期待できます。
- 子供たちにとっては、実物の写真や資料が電子黒板などで提示されると、わくわくして学ぶ意欲が高まったり、タブレットパソコンですぐ調べたり、書き込んで記録したり、写真や動画で記録したりするなど学習への理解を助けたりしてくれます。
- 教師にとっても、教材の準備などを効率的にすすめることができます。また、「授業で子供たちに本物に出会わせたい」など、授業の可能性を広げたり、子供たちにとって分かりやすい授業を工夫したりすることができます。
- ただし、活用次第では逆効果になる場合もあります。例えば、教師側からスライドなどで一方的に大量の情報を提示し、説明するだけでは、子供の主体的な学びは妨げられてしまいます。そのようなことに陥らないように、「子供たちの学び」の側に立って、単元全体を通して、ICTをどこでどのように使えば目標の達成に効果的か、単元の構想を立てて活用していくことが大切です。



Before

- ・せっかく電子黒板やタブレットパソコンがあるのに、授業での効果的な活用が分からない。
- ・ICT機器が教室にあるのに、使われていない。
- ・1時間の授業中ずっとタブレットパソコンを使っている。



After

- ・単元・題材や本時において、効果的な場面で目的に応じたICT機器が活用されている。
- ・目的に応じていつでも教師や子供たちが使えるように管理されている。
- ・相手意識、目的意識をもって、効果的な場面で使っている。

2 授業でのICT活用における留意点

- 「ICT活用」そのものが、目的になっていませんか。授業におけるICT活用が、逆効果にならないように、以下のチェックリストで、ポイントを明確にした活用を心がけましょう。

☑学習活動

- ☐授業者がスライドで一方的に説明する授業で、子供の主体的な学びが妨げられる。
- ☐講義形式の授業で、子供が話し合ったりノートにまとめたりする時間が十分でない。
- ☐板書がおろそかになり学びのあとが整理されず、授業全体の振り返りができない。

☑提示資料

- ☐提示した資料が焦点化されておらず、子供がどこを見ればいいのか分からない。
- ☐文字や画像が小さく、教室の後ろからははっきり見えない。
- ☐提示するスライドの量が多く、次々に切り替わることで集中力が途切れてしまう。

3 主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの活用例

- 先進的に取り組んできた学校の取組を参考に、ICTの効果的な活用例を紹介します。

①単元〈題材〉や1単位時間の導入場面で興味・関心を高め、学習課題・めあてを明確に把握させ、能動的な学びにつなげる
[電子黒板、デジタル教科書等の活用]

子供たちの『なぜ』『おそらく』が生まれる導入では、子供たちの驚きや発見があり、矛盾、困惑、葛藤を抱かせる教材を提示し、知的好奇心を高め、課題意識をもつことができるようにしましょう。

特に、指導者用のデジタル教科書には、映像資料や写真、イラスト、グラフなど豊富なコンテンツが組み込まれ、拡大して提示することができ、子供たちの学習意欲を高めることができます。



小5「社会」
農産物に関するグラフを拡大提示し、食糧生産について課題意識をもたせる

②学習課題や個々の興味・関心に応じた調べ学習 [端末の活用]

子供たちが自ら問いをもち、課題の解決に向かっていくためには、子供たち一人一人の興味・関心に応じた調べ学習ができるようなツールが必要です。一人一台の端末（タブレットパソコン）の環境整備を行いつつ、学習形態を工夫するなどして個の学びが充実するよう工夫しましょう。



中1「英語」
個人の進度に合わせてA Iドリルに取り組み、英会話に習熟する

③知識・技能の定着を図ったり、自分の課題（つまずき）に応じて取り組んだりする [端末の活用]

確実に定着させたい知識・技能などについては、子供一人一人のペースで、何度も繰り返し練習したり、ドリルに取り組んだりするなど個に応じて取り組むことができるのも、ICTの強みの一つです。



小1「算数」
Web上のドリルソフトで時計の読み方の習熟を図る

単元・題材のまとまりによる学習過程
〈一単位時間による展開〉

④「本物」に触れることで実生活や実社会への関心を高め、更なる能動的な学びにつなげる
[オンラインによる遠隔授業等]

「この学習では、ぜひ専門家の人の考えや経験を聞かせたい」と思っても、一度きりの交流で終わったり、遠距離のため実現できなかったり、または、日程の調整がつかなかったりなど困難な場面があります。

テレビ会議システムを使ってオンラインで結ぶと、このような課題が解決でき、より一層、実生活や実社会への関心が高まります。



小6「理科」
JAXAの研究者とテレビ会議を実施し、星や天体への興味を高める

⑤相手意識・目的意識をもって、まとめ、発信（発表）し、コミュニケーションを行う [電子黒板・端末の活用]

双方向性のあるICT機器を有効に活用することで、子供たちは相手意識・目的意識を高め学びに向かい、まとめたり、発信（発表）したり、コミュニケーションしたりする活動をより能動的なものとする事ができます。

学習の中で、インプットしたものを、アウトプットすることで、学んだことを自分のものにすることができます。子供たち自身がいろいろなツールを駆使して、表現できるようにしましょう。



小1「生活」
実物投影機でまとめたワークシート等を拡大して示し、発表する

⑥考えを共有し自己の考えを広げ深めたり、学びを振り返り次の学びへとつなげたりする
[電子黒板・端末の活用]

友達の考えを知ることで、自己の考えを広げたり深めたりすることができます。

考えを書いたノートを実物投影機などを使って大きく提示すると瞬時に全体で共有することができます。端末を使って、自分の考えを打ち込み、電子共有ボードなどのソフトで共有することができます。

また、学びの振り返りを記録し、自分だけの電子ポートフォリオとして学びの足跡を残すこともできます。



中2「理科」
班で課題解決した考えを実物投影機で提示しながら説明し、相互評価する

ここで示した取組以外にも、多くの活用が図られています。県教育委員会のホームページをぜひご覧ください。

熊本県教育情報システム (CoLaS)

検索

重点2 「単元のゴールの姿」に向けて、「単元・題材のまとめり」で授業を構想しましょう【学習構想案】

熊本の授業づくりの理念の下、

「確かな指導観に基づき、子供の学びの側から学習を構想する」

～すべての子供たち一人一人の「学び」は、教師の「指導する（教える）」授業を子供たちの学びの側から「構想する」学習として捉え直す中で、見えてくる～

※熊本の授業づくりの理念…教師が基礎的な知識及び技能を徹底して身に付けさせ、子供自らが、課題解決に向けて能動的に学ぶこと

- 新学習指導要領では、単元など内容や時間のまとめりを見通して授業を構想することが求められています。「主体的・対話的で深い学び」は、1単位時間の授業の中で全てが実現されるのではなく、単元など内容や時間のまとめりの中で、学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考えて、授業を構想していくことが大切です。
- そこで、「熊本の学び」では、子供の主体的・対話的で深い学びの姿、そして単元の最後の学習を終えたときの子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）を具体的にイメージし、その実現に向けて単元のまとめりで授業を構想することを大切にしています。本県では、これまでの一般的な学習指導案の項目・内容に、次の3点を加えたものを「学習構想案」とし、推進していきます。

【大切にしていきたい項目】

- ①単元終了時の子供の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）
- ②単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）
- ③単元で働かせる見方・考え方

- 各学校では、本推進プランで示す学習構想案を参考にして、学校の実情に応じて創意工夫するなど、積極的に取り組んでいただくことを期待しています。

まず、学習構想案についてQ&Aの形で示します。

Q1 これまでの学習指導案とどう違うのですか？

- 本推進プランで示す学習構想案は、これまでの学習指導案で示してきた項目・内容を含んでおり、大きく変わるものではありません。
具体的に、これまでの一般的な学習指導案と比較してみると、右ページ上段の表のようになり、主な違いは次の2点です。
- 項目・内容に関して、「大切にしていきたい項目」の3点（表の下線部分）を追加していること。
- 表記の順序に関して、単元構想の中心となる大切な項目を「1 単元構想」としてまとめ、最初に明記していること。（小研等での略案作成の参考としていただくことも想定しています。）

これまでの一般的な学習指導案	本推進プランで示す学習構想案
1 単元名	1 単元構想 ○単元名
2 単元について (1) 単元観 (2) 系統観 (3) 児童(生徒)の実態 (4) 指導上の留意事項	○単元の目標 ○単元の評価規準 <u>○単元終了時の児童(生徒)の姿(単元のゴールの姿・期待される姿)</u> <u>○単元を通した学習課題(単元の中心的な学習課題)</u> <u>○本単元で働かせる見方・考え方</u>
3 単元の目標	○指導計画と評価計画
4 単元の評価規準	2 単元における系統及び児童(生徒)の実態 ○学習指導要領における該当箇所 ○教材・題材の価値 ○本単元における系統 ○児童(生徒)の実態
5 指導計画及び評価計画	3 指導に当たっての留意点
6 本時の学習 (1) 目標 (2) 展開	4 本時の学習 (1) 目標 (2) 展開

Q2 学習構想案で示されている項目・内容や形式、表記の順番等については、すべて同じように作成したほうがいいのですか？

- 本推進プランで示す学習構想案はあくまで推奨モデルですので、すべての項目・内容や形式、表記の順番等に従って書くというものではありません。各学校では、校内研究の内容とも関連させて研究を深め、本推進プランで示す項目・内容等を参考として取り入れ、可能な限り導入をしていただければと考えています。
- ただし、「熊本の学び」では、単元を通して学んだ子供の姿を具体的にイメージし、単元のまとまりで授業を構想すること(単元構想)を大切にしてほしいということから、「大切にしていきたい項目」の3点については、各教科等の特質及び単元の内容に応じて明記していただくようお願いします。
- ※略案として作成する場合も、この3点については明記をお願いします。
- ※教科等の特質及び単元の内容によって「単元を通した学習課題(単元の中心的な学習課題)」の設定が難しい場合は、明記しないことなども考えられます。
- 大切にしてもらいたいことは、学校の実態に応じて工夫・改善を重ね、「熊本の学び」の理念の実現に迫る授業づくりへとつなげることです。

Q3 評価については、どのように変わるのですか？

- 新学習指導要領では、目標及び内容が三つの柱で整理されるとともに、評価の観点も三つに整理され、内容のまとまりごとの「評価規準」が示されました。
- また、今後の学習評価の在り方については、これまでのように、毎時間、児童生徒全員について記録をとり、総括の資料とするために蓄積することは、現実的でないため、児童生徒全員の学習状況を記録に残す場面を精選し、かつ適切に評価するために、「記録に残す評価」と「指導に生かす評価」に区別して示されました。
- そこで、本県では、これまでのより精度の高いものさしとして設定してきた「評価基準」の考えを継承し、「具体的評価規準」として、主に「記録に残す評価」の場面で設定することを推進します。

ここからは、「学習構想案」作成の際の留意事項について示します。

第〇学年 〇〇科 学習構想案

日時 令和元年〇〇月〇〇日 (〇) 第〇校時
 場所 〇年〇組教室
 指導者 教諭 〇〇 〇〇

内容のまとまりごとに評価規準を設定します。各教科・領域で確認しましょう。

1 単元構想

単元名	教科・領域に応じて、「単元」か「題材」かが決まります。教科・領域の特質に応じて設定してください。		
単元の目標	(1)	(2)	(3)
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	「熊本の学び」では、この3項目を設定することがポイントです。ここで設定した子供たちの学びの姿や学習活動について、校内研修等で検証しましょう。		

単元終了時の児童の姿（単元のゴールの姿・期待される姿）

単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）

本単元で働かせる見方・考え方

指導計画と評価計画（〇〇時間取扱い 本時〇／〇〇）

過程	時間	学習活動（「問い」を設定しても可）	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体の評価規準」を記載
		具体的な学習活動を設定します。「問い」で学習活動を方向付けることもできます。一単位時間ごとの「問い」を示すと、子供たちとの共有も図られます。	質的な評価の精度を上げるために、「具体の評価規準」を設定します。国立教育政策研究所から提示される例を参照に設定しましょう。 ※ 単元全体を見通して、子供たちの学習状況について記録に残す評価の場面を精選し、適切に設定しましょう。

単元や題材における内容や時間のまとまりを見通して、子供たちの学びを構想します。「過程」は、教科等の特質や学校の研究内容等に応じて設定してください。

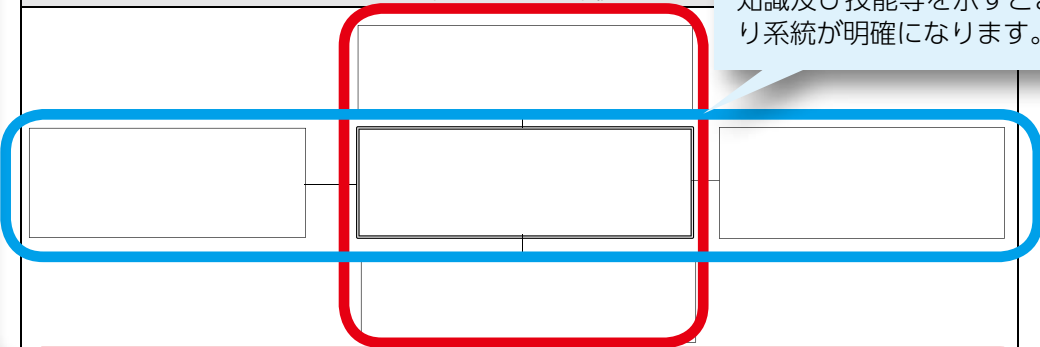
※ 学習を構想する大切な箇所です。教師が教える場面はどこか、子供が学習を見通したり、振り返ったりする場面はどこか、ICTの活用場面はどこか、具体的に設定しましょう。学校の研究内容に沿ったものにすることが大切です。

※このページは、略式の学習構想案で作成する際は、省略できる項目を掲載しています。ただし、詳細に作成する際は、教材研究を深めたり、子供たちの実態をつかんだりして、より精度の高い学習構想案を立てることができるようにしましょう。

2 単元における系統及び児童の実態

学習指導要領における該当箇所(内容, 指導事項等)	
教材・題材の価値	
本単元における系統	
児童の実態(単元の目標につながる学びの実態)	
<ul style="list-style-type: none"> ■本単元を学習するにあたって身に付けておくべき基礎・基本の定着状況 ■本単元の学習に関する意識の状況 ■考察 	
3 指導に当たっての留意点(「校内研修の取組の視点」等から指導上の留意点等について明記)	
<ul style="list-style-type: none"> ○ ○ ○ ○ 	
※「人権が尊重される授業づくりの視点」等(学校が設定する項目からそれぞれ明記)	

単元の系統については、縦に、他学年でのつながりを、横に当該学年での他単元とのつながりを示しています。特に、単元名だけではなく、その単元で身に付けるべき基礎的・基本的な知識及び技能等を示すとより系統が明確になります。



例えば、全国学力・学習状況調査や県学力・学習状況調査等の結果、調査問題を活用したレディネステスト等を基に、本単元・題材の目標等を達成する上で身に付けておくべき基礎的・基本的な知識や技能等の定着状況を示します。(教科の特質や単元の内容に応じて設定してください。)

単元に関する学習の状況や子供たちの意識等を示します。事前調査と比較し、学習後の変容等が把握できるように必要な項目を設定することも大切です。

※ 「指導に当たっての留意点」については、校内研修(研究の視点)等による授業改善の方向性等について、焦点化して示しましょう。また、人権教育との関連、道徳教育との関連、キャリア教育との関連など、学校等で設定する視点を示しましょう。カリキュラム・マネジメントの視点から、学校で設定した教科等横断的に育成を目指す資質・能力について明記することも考えられます。

「『問い』を生み出す手立て等」や「言語活動及び設定の意図」など、ここに示しているのは指導上の留意事項の例です。作成する際の参考にしてください。

4 本時の学習
(1) 目標

本時の目標とめあて、学習課題との整合性を図り、子供たちと共有できるように、分かりやすく提示しましょう。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 (◇予想される児童の発言)	指導上の留意事項 (学習活動の目的・意図、内容、方法等)
導入	5分	1 ① ◇	○ ○
		【めあて】 ② ◇ 【学習課題】	(「問い」を生み出す手立て等) ○ (見方・考え方を働かせて課題解決に向かう方向付け) ○ (課題解決に向けた見通しを持つ手立て) ○
		2 ① ◇	(個に応じた支援) ○ (課題解決に粘り強く取り組もうとするための手立て等) ○ (言語活動の設定及び設定の意図) ○
		② ◇	【具体的評価規準】観点 ○ (方法：ノート・発言)
終末	10分	3	○
		【期待される学びの姿】 【到達していない児童への手立て】 ○	○
		【まとめ】 ◇	○

本時の中心となる学習活動を通して、子供の「期待される学びの姿」を具体的に設定しましょう。

※ 単元・題材における内容や時間のまとまりの中で学習を構想し、必要な場面で「まとめ」や「振り返り」の活動を設定しましょう。
ただ「振り返る」のではなく、何をどのように振り返るのか、ねらいをもって振り返らせることが大切です。

【参考】 このページは、参考までに示しています。
必要に応じて、板書計画を立てたり、ICTを活用する計画を立てたりすることが考えられます。
日常の授業では、主に板書計画を作成して授業に臨むことが考えられます。

【板書計画】

※ 板書計画により、「問い」(学習課題・学習問題)によって引き出された子供たちの反応を想定しておくことで、子供たちのつづやきを拾い上げたり、ゆさぶりをかけて学習への意欲を高めたり、新たな問いへつなげたりすることができます。

【ICT活用計画】

例：教師による教材提示の計画、ICTを活用した発表、まとめ等による考えの共有の計画等

ICTの活用については、P 43～44の「主体的・対話的で深い学びへとつながるICTの活用例」を参考に、効果的な活用について計画を立てましょう。

※その他 課題解決を図る情報収集計画、検証結果やパフォーマンスの記録計画など(シーンに応じて活用計画を立てる)

【見方・考え方を働かせて解く適用問題等の計画】

例：単元の終末では、見方・考え方を働かせて次の学習に取り組む

※ 学力調査問題等の他にも、実生活からリアリティーのある問い(学習課題・学習問題)を設定し、子供が見方・考え方を働かせて、次の問題に取り組んでいくことができるようにします。

ここからは、小学校国語科を例にした、「学習構想案」を紹介します。

第6学年 国語科 学習構想案

日時 令和元年〇〇月〇〇日 (〇) 第〇校時
 場所 〇年〇組教室
 指導者 教諭 〇〇 〇〇

1 単元構想

単元名	作品の魅力を推薦カードに書いて伝えよう「海のいのち」(発行者名「教科書名」p.〇〇~〇〇)		
単元の目標	(1) 語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすることができる。 [知識及び技能] (1)オ (2) 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。 [思考力、判断力、表現力等] C(1)オ (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする。 「学びに向かう力、人間性等」		
単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	①語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。(1)オ ②比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。(1)ク	①「読むこと」において、登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えている。(C(1)イ) ②「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。(C(1)オ)	①進んで登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉え、学習の見通しをもって、考えたことを推薦カードにまとめようとしている。
単元終了時の児童の姿(単元のゴールの姿・期待される姿)			
物語を読むときに表現の工夫など、言葉に着目して場面の様子や心情の変化を読み、作品の魅力を伝えようとする児童			
単元を通した学習課題(単元の中心的な学習課題)		本単元で働かせる見方・考え方	
「海のいのち」の作品の魅力を推薦カードにまとめ、伝え合おう。		登場人物の行動や会話、情景描写などの言葉に意識的に着目して、言葉への自覚を高めること。	
指導計画と評価計画(10時間取扱い 本時7/10)			
過程	時間	学習活動	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」を記載
一	2	○ 作品の魅力を推薦カードに書く体験を通して、推薦する言語活動を行うために必要な学習について見通しをもつ。 ○ 単元の学習計画を立て、物語の構成や内容を確認する。	【態①】(ワークシート) 【思①】(ノート)
二	6	○ 父の人物像から、太一の心情を読む。 ○ 与吉じいさの人物像から太一の心情を読む。 ○ 母の会話から太一の心情を読む。 ○ クエの描写から太一の心情を読む。 ○ <u>太一の表情の描写から太一の心情の移り変わりについて読む。(本時)</u> ○ あと語りの場面の効果について読む。	★【知①】(ノート) ○ 地の文にある色彩表現、会話文にある比喩などの表現の工夫に気付いている。 ★【知②】(ノート) ○ 登場人物の行動や情景を描写した語句の工夫や変化について理解している。 ★【思①】(ノート・発言) ○ 太一自身やほかの登場人物の描写などから、人物相互の関係や太一の心情を捉えている。 【思②】(ノート・発言)
三	2	○ 作品の魅力を伝える推薦カードを書き、相手の求めに応じた推薦カードを紹介し合う。 ○ 単元で身に付けた力を振り返る。	★【思②】(ワークシート) ○ 読んで理解したことを基に、自分の考えを推薦カードまとめている。 ★【態①】(ノート) ○ 描写を基に、登場人物の関係や心情についての自分の考えを、進んで推薦カードにまとめようとしている。

2 単元における系統及び児童の実態

学習指導要領における該当箇所(内容, 指導事項等)				
小学校学習指導要領第5学年及び第6学年 [知識及び技能] (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 [思考力, 判断力, 表現力等] 「C読むこと」				
教材・題材の価値				
本教材は, 物語の構成がはっきりしており, 直接的に心情を描写した叙述が少なく, 会話文や動作の描写, 情景描写などから暗示的に示されている心情などを読み取っていくことに適している。				
本単元における系統(横軸を当該学年での他領域とのつながり, 縦軸を他学年での同領域のつながり)				
<div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 5年「大造じいさんとがん」 情景描写に着目し, 登場人物の心情を捉える </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%; text-align: center;"> 6年「風切るつばさ」 行動や会話に着目し, 登場人物相互の関係を捉える </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%; text-align: center;"> 6年「海のいのち」 行動や会話や情景描写に着目し, 登場人物の心情を捉える </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%; text-align: center;"> 6年「ヒロシマのうた」 行動や会話や情景描写に着目し, 自分の考えをまとめる </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 中1「飛べ かもめ」 場面の展開や情景描写に着目し, 自分の考えを確かなものにする </div> </div>				
児童の実態(単元の日標につながる学びの実態)				
■本単元を学習するにあたって身に付けておくべき基礎・基本の定着状況 (H〇年全国学力・学習状況調査) (%)				
調査内容	概ね(6割~8割程度)	十分(8割以上)		
語句と語句との関係を理解することができる。	—	—		
心情などについて, 描写を基に捉えることができる。	—	—		
考えたことを推薦カードにまとめることができる。	—	—		
■本単元の学習に関する意識の状況 (%)				
調査内容	よく	まあまあ	あまり	ない
自分の考えを深めたり, 広げたりすることができていると思う。	—	—	—	—
課題解決に向けて, 自分で考え, 自分から取り組んでいたと思う。	—	—	—	—
推薦するときには, 相手の求めに応じて推薦していたと思う。	—	—	—	—
■考察 (資質・能力に関して) 語句と語句との関係を理解することは概ねできているものの, 文脈に沿った理解については, 今後も重ねて指導が必要である。描写を基に心情を読むことは不十分な状況にあるため, 一つ一つの描写に対して, 語句の理解を確認するとともに, その描写から想像される心情を対話によって他者と確認し合う学習が必要である。推薦するという言語活動の経験はあるものの, 相手の求めに応じて推薦するという意識はあまり高くなく, 相手意識をもたせる必要がある。 (学びに関して) 主体的・対話的で深い学びの視点から, 学びの状況を見ると, 課題の解決に向けて, 自分から取り組むなど, 主体的な姿がある一方で, 自分の考えを深めたり, 広げたりすることについては, あまりできていない。対話や交流の場面があることによって, 自分の考えがどのように変容したかを実感する学習が必要である。				

3 指導に当たっての留意点

- 作品の魅力を紹介文にまとめ, 伝え合うという目的意識・相手意識を明確にすることによって, 主体的に学ぶことができるようにする。
- 推薦文を書くために, 作品の魅力を見つけるポイントを明確に示し, それが読みの手がかりとなるように工夫する。
- 単元の導入時に推薦カードを書く活動を体験する場面を設けることで, 児童が言語活動の遂行に対する課題意識を持てるようにする。

4 本時の学習

(1) 目標 推薦カードにまとめるために、太一の様子の描写について着目し、瀬の主を殺したい気持ちから、海のいのちを大切にすることに変わった太一の子の心の移り変わりを読むことができる。

(2) 展開

過程	時間	学習活動 (◇予想される児童の発言)	指導上の留意事項 (学習活動の目的・意図、内容、方法等)
導入	5分	<p>1 課題をつかむ。</p> <p>①表現の工夫の意図など、これまでの作者の書きぶりを振り返る。 ◇これまでは色彩描写により登場人物の様子を詳しく表す書きぶりを学習したな。</p>	<p>○単元のゴールを確かめ、単元計画からめあてを設定する。</p>
		<p>【めあて】 太一の様子を表した描写から、太一の子の心の移り変わりを読もう。</p> <p>②作者の書きぶりについて問いをもつ。 ◇どうして、ここだけに太一の子の表情が書かれているのだろう。</p> <p>【学習課題】 太一の子の表情の変化によって、太一の子の心はどのように移り変わったのだろう。</p>	<p>(「問い」を生み出す手立て等)</p> <p>○山場の場面の太一の子の描写について、挿絵を基にどのような表情なのかを問う。</p> <p>(見方・考え方を働かせて課題解決に向かう方向付け)</p> <p>○「泣きそう」「ふっとほほえみ」「えがおを作った」の言葉の理解について、近隣の児童同士で確認する。</p>
展開	30分	<p>2 課題の解決に向けて活動する。</p> <p>①自身の考えをもつ。 ◇表情が「泣きそう」から「えがお」に変わっているから、最後は心が変わっているようだ。</p> <p>②他者との対話により、考えをまとめる。 ◇「ふっと」という言葉から、自然に生み出された感じがする。だから、きっと太一は、ここで「海の命」を守ることに本当に気付くことができたと思う。 ◇「作った」ということは、さっきの「ふっと」とは違って、自分でしたということを表していると思う。</p>	<p>(課題解決に向けた見通しを持つ手立て)</p> <p>○「泣きそう」「ふっとほほえみ」「えがおを作った」の言葉を取り出し、それぞれにどのような心情が表されているかについて自分の考えを書くようにし、移り変わりを捉えやすくする。</p>
		<p>【期待される学びの姿】 太一の子の表情の描写に着目し、表情の変化に沿って、海のいのちを大切にしようとする移り変わる心情を想像している。</p>	<p>【具体の評価規準】 思① ○太一自身の描写から、太一の子の心の移り変わりを捉えている。 (方法：ノート・発言)</p> <p>【到達していない児童への手立て】 ○場面の最初と最後の心情の違いを確かめ、場面の途中でどのような心情になったのかを個別に問い、考えを確かめていく。</p>
終末	10分	<p>3 学習課題に対する答えをまとめ、めあてに対する振り返りをする。</p> <p>【まとめ】 太一の子の心は、瀬の主を殺し、父の敵を討ちたい気持ちから、(瀬の主の姿を見て) 海のいのちを大切にしようとする気持ちに変わった。</p> <p>◇今日も作者の工夫した書きぶりから、作者が考えをもって工夫していることがよく分かった。物語の表現の工夫についても着目して、ほかの作品も読んでみたいな。</p>	<p>○めあてや課題と照らして行い、課題解決の方法や学習内容をまとめる。</p> <p>○本時の学びの成果や課題とその要因、課題の改善方法等を共有する。 ○自らの学びを調整したり、新たな問いを設定したりするなど、振り返りを具体的に行う。</p>

【板書計画】

「海のいのち」（物語文）
立松 和平

単元の学習課題
「海のいのち」の作品の魅力を推薦カードにまとめ、伝え合おう。

※これまで読み取ったこと
【父の人物像から】
【与吉じいさの人物像から】
【母の会話から】
【クエの描写から】

めあて
太一の様子を表した描写から、太一の心情の移り変わりを読もう。

本時の学習課題
「太一の表情の変化によって、太一の心情はどのように移り変わったのだろうか。」

解決方法
※山場の場面では
『太一の表情の描写』から読む
「泣きそう」
「ふっとほほえみ」
「えがおを作った」
※自分の考えをまとめる
・表情の変化が「泣きそう」から「えがお」に変わっている。
・悔しかったはず、でも、笑顔になっているから、最後は心情が変わっているようだ。

クエのイラスト

太一のイラスト

交流
※友だちや他のグループの考え
・「ふっと」という言葉から、自然に生み出された感じがする。だから、きっと太一は、ここで、「海のいのち」を守ること本当に気付くことができたと思う。
・「作った」ということは、さっきの「ふっと」とは違って、自分でしたということを表していると思う。

まとめ
太一の心情は、瀬の主を殺し、父の敵を討ちたい気持ちから、（瀬の主の姿を見て）海のいのちを大切にしようとする気持ちに変わった。

【ICT活用計画】

例：教師による教材提示の計画、ICTを活用した発表、まとめ等による考えの共有の計画等

例デジタル教科書にある挿絵を電子黒板で拡大提示し、課題に迫る読み取りのイメージを共有する。

クエのイラスト

【提示①】
本時の「山場の場面」を共有できるように、この挿絵を拡大提示する。

太一のイラスト

【提示②】
本時の課題解決のキーワードなる、「太一の表情の描写」に迫れるようにこの挿絵を拡大提示する。

この挿絵を、一人一人の端末（タブレットパソコン）に配付し、文章から読み取った自分の考えを直接書き込み送信することで、全体共有の場において、瞬時に電子黒板に拡大提示して、共有化を図ることができる。

※単元を通した課題である「『海のいのち』の作品の魅力を推薦カードにまとめ、伝え合おう」による作品づくりについては、伝え合う際に、共有化が図れるように、一人一人の端末（タブレットパソコン）で行う。

※その他 課題解決を図る情報収集計画、検証結果やパフォーマンスの記録計画など（シーンに応じて活用計画を立てる）

【適用問題等の工夫】

例：単元の終末では、これまで身に付けたことを生かして次の学習に取り組む

例1 ※語句と語句との関係、語句の構成や変化についての定着状況の確認
【全国学力・学習状況調査】平成〇〇年度 大問〇
【熊本県学力調査「ゆうチャレンジ」】平成〇〇年度 大問〇
【課題克服プリント】平成〇〇年度提供 問題〇

例2 ※本単元で働かせた見方・考え方を生かして立松和平の他の作品や同じようなテーマを扱った物語を読み感想を書くことなども考えられる。

その他の教科・領域の学習構想案は、熊本県教育委員会のホームページに掲載していきます。

熊本県教育委員会

検索